

高橋克実さん（高24 昭和47年卒）8組

# 英語は天命

関西外国語大学教授（英語、秘書学） 元松下電器産業（現パナソニック）社長秘書・通訳



英語が話せたらいいなと思う人は多いはず。その英語を極めて人生を切り開いていった高橋克実教授にインタビューをさせて戴きました。高橋さんは英文科を出て勉強を続け先生になったわけではありません。どんな風に英語と関わり、どんな英語を習得されたのでしょうか？

## 子供の頃からの夢 海外へ

高橋さんは何代も続く生粋の京都人として生まれますが、子供の頃から外国に行きたいという強い願望がありました。小学校の卒業文集にも外交官になりたいと書いています。堀川高校ではユネスコクラブに所属し部長になります。ここでクラブ顧問であった恩師小谷先生と出会い大きな影響を受けます。ボランティア活動や海外文化の研究等の活動を通じ海外に大きく視野を広げます。剣道部にも所属し文武両道を目指しました。大学時代には少林寺も習得しますが、これも後々に役立ちます。コミュニケーションのために英語の必要性をひしひしと感じて、立命館大学ではESS(英語研究会)に入部し部長も務めます。そこで英語にさらなる磨きをかけ海外での活動の決意を固めます。

1976年就職先も松下貿易(現在のパナソニック。当時、貿易部門は別会社でした。)を選びます。どこまでも海外で活躍したいという思いからです。そして競争率約60倍という難関を切り抜け就職します。就職後も英語に精進し1978年の実業団の英語スピーチ大会で並み居る各企業のトップを押さえ本当に日本一になってしまいます。しかもその大会で記念講演をされた通訳の神様と言われた村松増美先生と出会います。この後、長年に亘り公私ともにお付き合いが続き高橋さんにとっての英語の師と仰ぐ存在となり、村松先生からも最後の弟子の一人と認められるようになりました。

松下貿易では、貿易実務からスタートし海外でのビジネスのノウハウを積み上げていきます。新人でありながら積極的に

提案を行う能力を買われ人事部で社員教育を7年にわたり担当します。その後、現場の経験もしなくてはいけないということで、ついに1982年最初の海外赴任のチャンスをつかみました。ただし、赴任地はなんと南米ペルーでした。得意の英語は通じません。スペイン語の世界です。業務は電池を販売する仕事でした。この時点で電池のシェアはアメリカの会社がトップでした。これをひっくり返すべく奮闘を開始します。英語が通じなくても言語を超えたコミュニケーション能力でマーケットを切り開いていきます。なんと、その方法はスーツではなく少林寺拳法の胴着で南部の客先を訪問することでした。取引先の興味を引いたのは、もちろんですが訪問先の地元ラジオ局の取材を受けるほどの注目を浴びます。このような努力の結果ついに、たった1年でライバルを打ち負かし地元ではシェアナンバー1を獲得します。ここで言語だけではないコミュニケーションというものを体験したと言います。無論最終的にスペイン語も習得し今でも結構話せるそうです。



優勝トロフィーを手に



ペルー南部のアレキーパで

## 社長専属の通訳に シンガポールに赴任も

帰国後は東京へ転勤し、英語にますます磨きをかけ87年にNHK教育のビジネス英語番組のオーディションを受け合格生徒役としてレギュラー出演するほどとなります。ここで、ますます村松先生と交流が深まります。東京で結婚相手もゲットし、なんと村松先生に仲人をしてもらうこととなります。



谷井社長(当時)と共に

遂には、その英語力とバイタリティを買われ88年から5年にわたり松下電器産業の社長専属の通訳となります。お相手は大企業の幹部のみならず、各国の首脳等VIPばかりです。会社専属の通訳ですから、あれは通訳が間違っていたなどの言い訳は通用しません。少しの誤訳も許されない厳しい環境に身を置くこととなります。また専属通訳が語る英語は、そのまま社長自身の言葉と捉えられます。ある時、アジアの政府幹部との会談中に「樂觀できない」と

## NHKで村松先生と



社長がいったものを、「Pessimistic(悲観的)」と表現して怒られたそうです。社長としては同じ内容でもネガティブな単語はそのような場で使いたくなかったそうで社長の心中までも読み取らねばならないのです。



## エズラ・ボーゲル教授と共に



90年にはハーバードビジネススクールの Program For Management Development にも参加し修了します。各国から集まった優秀なメンバーと英語で議論を数週間にわたって戦わせるという貴重な経験もします。あの「Japan as No.1」で有名なエズラ・ボーゲル教授とも直接話すことが出来たそうです。高橋さんの英語は正にビジネス現場での強力なツールとなっていきます。

順風満帆に見えた人生ですが1999年大きな問題が起こります。大病を患ったのです。腰の痛みを感じて診察したところ何と腫瘍が見つかったのです。10万人に1人の脊髄腫瘍という難病でたとえ手術が成功しても、車いす生活になる可能性もと言われてきました。それを聞いたときは、本当に足が震えたそうです。ところが手術は大成功し、奇跡的に3ヶ月で現場復帰を果たします。

2007年から約4年にわたり二度目の海外赴任をシンガポールで果たします。松下が手がける海外での数々のイベントや広報活動を仕切る立場となります。F1レースや世界で初めて開催されたユース五輪などの松下がスポンサーを務めるイベントでマネージメント力と語学力をいかし活躍されます。松下を代表する

だけでなく日本をも意識して情報を発信しなければいけない仕事であり、大変だったそうですが刺激的で非常に面白かったそうです。シンガポールの閣僚など要人もコミュニケーションを図っていくなど、今まで培った英語と経験を生かしこれらの仕事をこなしていきます。プライベートでは表千家家元公認の海外初の茶会を同門各位と企画し実行委員長を務めるなど日本文化の紹介にも勤めます。現地の人たちとの交流も深め、講師を招いてホームパーティーを定期的に開くなどますます交流の場を広げていきました。こうして小学校の頃夢見た海外に出て活躍するという夢を現実のものとしたのです。



F1ピット前



日本人会館でのお茶会にて



世界初のユース五輪  
で聖火ランナーに

## 第二の人生は 関西外国語大学で教師に

定年後は、秘書検定一級という難しい資格も取り、実践で磨き上げた英語を教えるという第二の人生をスタートさせます。関西外国語大学で英語を教える教授となられたのです。英米文学としての英語も大事ですが、実際のビジネスで使われる英語も重要です。この英語を身につけることが、どれほどの力になるかは言うまでもありません。また、これを教えられる人というのは案外少ないような気がします。今度は若い人たちに囲まれ、持ち前のバイタリティと経験で学生達をぐいぐいと引っ張っていきます。今までのビジネスの世界とは、また違う興奮を感じるそうです。高橋さんが数々の恩師に巡り会い人生を変えていったように、今度は高橋さんと出会った学生達がどんな影響を受け、巣立っていくのでしょうか。英語をいかにしゃべるか(HOW TO)は無論のこと、何を語るか(What), 最終的にはなぜ(Why)話さなければならないのかまでを考えるヒントを伝えていきたいとおっしゃっています。高橋さんの「振り返ってみれば結局英語を通して日本と世界の小さな架け橋の一人となることが自分の天命かもしれない。」と語られた笑顔が印象的でした。

企画・取材・撮影 河岸勝弘



関西外大中宮キャンパスにて